

2020年
7月1日
No. 121
隔月1回発行

特定非営利活動法人
レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク会報

ひきこもり

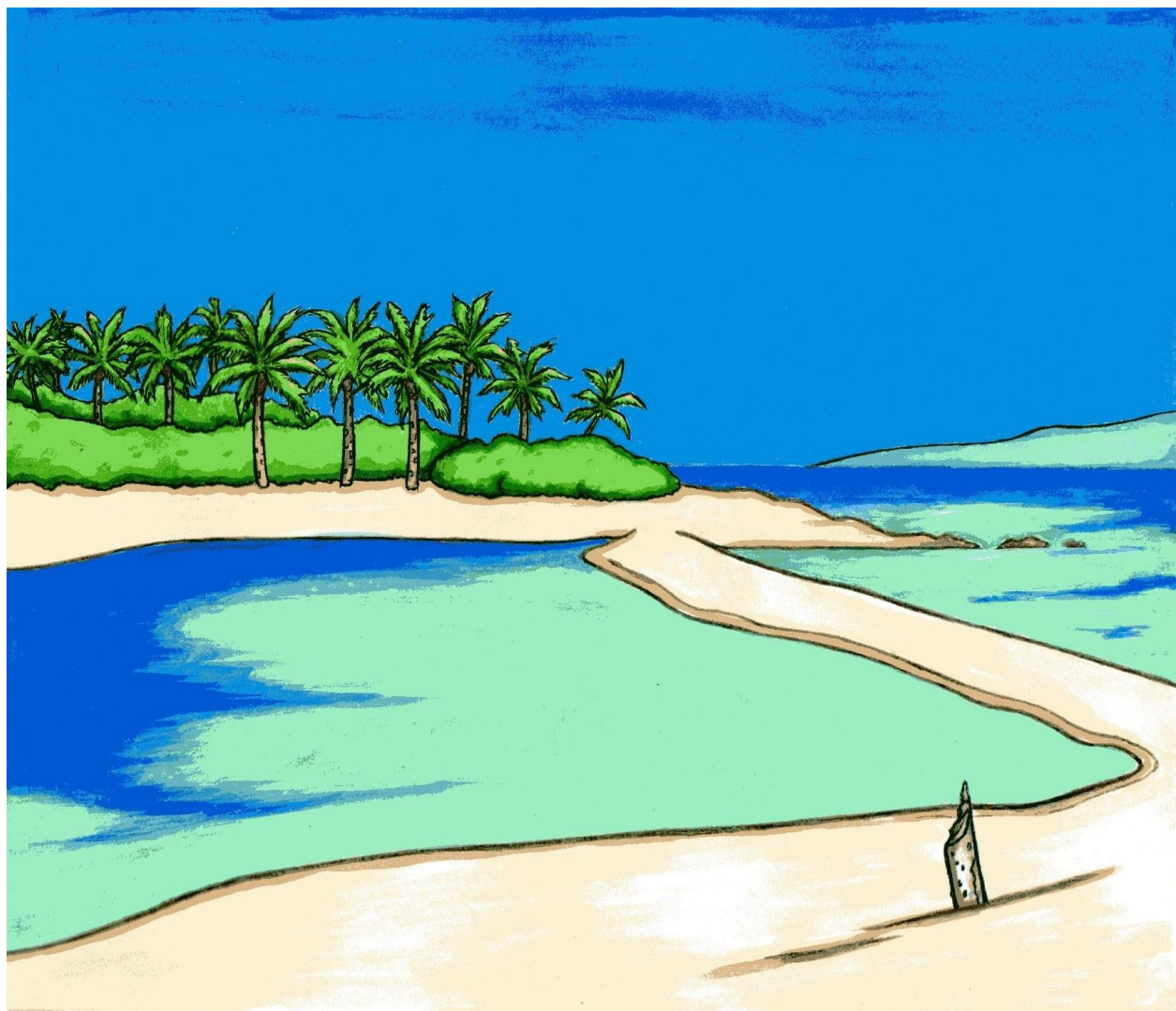


イラスト 小松 英行



会報は札幌市さぽーとほっと基金助成事業・ひまわりピア・サポート基金により作成されています

Index

- 2ページ 居場所「よりどころ」とはどんな場所？
- 3ページ オンラインSANGOの会開催報告
サテライト・カフェ実務者による会議を小樽・江別で開催
- 4ページ コロナ禍での現場の奮闘・模索から見てきたもの
- 5ページ ひきこもりと老いを考える 第2回
- 6ページ 「いまこそ語ろう、それぞれのひきこもり」を読んで ほか
- 7ページ 刊行物の紹介
- 8ページ こちら事務局／編集後記

居場所「よりどころ」とはどんな場所？ ピアスタッフが解説

札幌市の中心部。「かでる2・7」という大きな建物の部屋で、月に4回主にひきこもり当事者やその親が参加している活動がある。名前は「よりどころ」と呼称し、居場所活動をしている場づくりである。さて「よりどころ」とはどんな場所なのだろうか、そこで活動しているピアスタッフから、活動内容について述べさせていだきたい。

よりどころでは居場所活動をしている。居場所とはどんなものなのだろうか。『精選版日本国語大辞典』を引いてみると、①人などが住んでいるところ。居どころ。②人が、世間、社会の中で落ち着くべき場所。安心していられる場所。とある。近年は、不登校やひきこもり、子ども関係の居場所事業として聞く言葉でもある。先の辞書の出典によれば、住んでいるあるいは居ることは、どこにおいても、どこの場合においても成立するはずだ。しかし、あえて居場所という言葉があるのは、②の意味にある安心していられる場所であることを指し示すために使われるからであろう。その居場所であるが、近年では様々な場所につくられてきている。しかし、留意しておきたいことがある。それは居場所とは本人の感覚として感じられるかどうかに依る、きわめて情動的なものであることだ。公・民の各種団体が設立するだけでは成立しえない存在、それが居場所である。

「よりどころ」では、居場所としてどのような活動をしているのだろうか。最初に月4回実施していると述べたが、当事者だけが参加する会を月2回、親だけが参加する会を月2回行い計月4回の実施となる。なぜ、当事者と親を分けるのか、それは安心感ある場所を担保するためだ。当事者と親は同じ屋根の下で暮らすことが多い（独居の当事者もいるが）物理的に近い存在であるが、気持ち的には遠くなる面もあるかもしれない。当事者にとって、親も同じ空間で生活していると素の自分が出せなかったり、緊張してしまうところがある。親からしてもそれは同じものだろう。わが子がいる前で、わが子の批判など中々できるものではない。安心感とは、素の自分をさらけ出せるような空気のなかで生まれる面もあるのではないだろうか。上記のような理由のため当事者と親を分けて活動しているものだと考え活動している。では、具体的に何をしているのかを述べていきたい。

まず、当事者会から述べさせていだきたい。当事者会では、落ち着ける雰囲気を感じ出しやすい和室の部屋を主として活動場所としている。そこでは、一人だけで過ごしてもいい場所があれば、グループで雑談をしたり、アナログゲームをしたりする場所があり、場所の移動は自由である。お菓子や飲み物も用意しており、時折それらをいただきながら和やかな雰囲気時間が経過する場所と

なっている。ここで大切になることは、この場に参加することで就職につながるなど、何らかの社会から望まれている成果を出すことは目的としないことである。何より大切にしたいことは、安心していられる場所に足りえるかどうかである。それは親の会にも言えることである。

次に親の会では、高齢の方もいることから椅子で座ることのできる部屋で行っている。最初に短い話題提供を行ってから各種グループに分かれて、近況報告やわが子との接し方、親自身が抱える悩みを同じ親同士で考えあう活動をしている。話題提供では、「ひきこもりのときの部屋での過ごし方」「お小遣いの是非」などを、当事者と親ピアスタッフの双方から実際的な話をしている。当事者の話は必ずしもわが子の状況に合致しないが、本人がどう感じ考えているのかを考える重要なきっかけになりうるのではないかと考える。また親ピアからはどう対応しているのかを考える知恵が得られるのではないだろうか。ほかには、専門の支援機関の職員からひきこもりに関する気付きを得る学習機会なども提供されている。

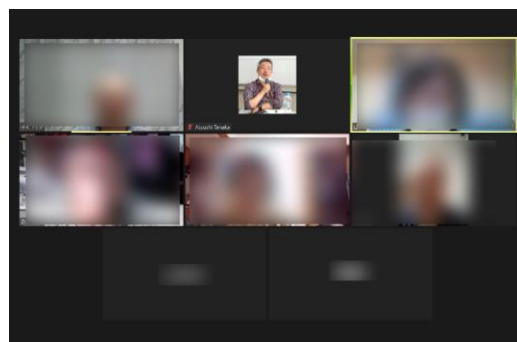
当事者会も親の会もピアスタッフと毎回ではないが専門機関の職員がいる。専門機関に相談につながることも可能だ。どちらの活動においても安心感を抱ける場所づくりを大切にしていきたい。

（よりどころピアスタッフ・大橋 伸和）

オンラインSANGOの開催報告 不安や悩みを率直に打ち明ける

新型コロナウイルス感染拡大が広がるなかでマスク着用や消毒液設置など配慮しながらのSANGO会は2020年3月まではリアル開催を続けていましたが、4月から会場である札幌市ボランティア活動センターの使用ができなくなったことからZOOMオンラインに変更し中止することなく今日まで継続しております。

4月22日開催のオンラインのSANGO会には6名の参加があり、このうち全国各地のオンライン当事者会を渡り歩く活動をしている埼玉県のある当事者の参加があり、全国の情報を提供してくれるなどリアル開催では得られない交流がなされました。続く5月27日開催のオンラインSANGOの会には埼玉県の当事者による誘い掛けなどに応じた関東圏の当事者や道内の当事者の参加が増え8名の参加がありました。「相談機関は家族以外と話す機会でしたが新型コロナウイルス感染拡大で中断して少し辛いです」「ゴミ出しすらためらって何日もゴミをためてしまします」「ヘアーサロンも苦手です」「対人恐怖症と同等の緊張があり言いたいことを上手くまとめられなくて、しどろもどろになります」など在宅生活で生じる不安や悩みが率直に打ち明けられお互い情報を共有し支え合う場面がありました。



(写真・1) ZOOM を活用したオンラインSANGO の会例会の様子

直近に行われました6月24日開催のオンラインSANGOの会では新型コロナウイルス感染拡大でメンタルが不調となり外出が困難になっている当事者や40代の同年代当事者との交流を望む道内の当事者などオンライン開催では男女新規2名を含む過去最多の9名が参加しました。今回はZOOMブレッキングアウトルームセッションを2回設け、少人数のグループで交流する場面も取り入れられました。なかなか話が尽きず遅れて参加した人もいたため定刻より延長して21時まで開催しました。当初オンライン開催は7月末で終える予定でしたが参加者の要望もあって8月以降もリアルな通常例会と併行して夜間実施することになりました。

8月5日から再開の通常例会は感染防止の観点から夜間開催は中止し午後枠で開催。オンラインは7月29日・8月26日です。

サテライト・カフェ実務者による 会議を小樽市と江別市で開催

6月23日火曜日、ひきこもりサテライト・カフェin小樽について3月末から電子ではやりとりしていましたが、リアルでの会議は初めて。3密を考慮しつつ小樽市役所福祉部長・次長ら幹部との会合をもちました

前年度までは保健所が窓口でしたが今年度から福祉部に移管いたします。実施方法や体制、会場、連携団体機関との委員会形成、周知方法等を協議し集会の呼称は地元当事者に懸賞付き公募することになりました。始動は8月からになる予定です。

7月9日木曜日、札幌圏域に新たなプラットフォームづくりをすすめる「2020年度ひきこもりサテライト・カフェin江別(当NPO主催助成金事業)」合同会議がZOOMオンライン会議場で行われ久しぶりに私も『リアル顔』で登場。行政や社協、保健センター、各事業所と当NPOのピアスタッフによる総勢13名が参加しました。9月から具体的な始動をすることになります。

お詫びと訂正

会報ひきこもりNo.120に下記に示す誤りがありましたのでお詫びして訂正申し上げます。

目次・2頁の活動報告欄
誤：公設民営の居場所「よろどころ」
正：公設民営の居場所「よりどころ」

コロナ禍での現場の奮闘・模索から見てきたもの

7月11日土曜日、JYC サマーフォーラム 2020「命か経済か」の議論の先へ コロナ禍での現場の奮闘・模索から見てきたもの、に zoom オンラインにて 43 名が参加した。

まず、岐阜大学の南出吉祥氏から先に若者支援に取り組む約 80 団体から得られたアンケート調査結果概要について説明。新型コロナウイルス感染拡大に伴い「居場所や実習などの活動が縮小」している実態があることや、その一方で「オンラインなどを駆使して相談は継続される」傾向を指摘。「外部との連携の取りづらさや、日々変化する状況に当事者や家族だけではなくスタッフも振り回される」現実、そして「ソーシャルディスタンスと言われながらもこれを成立できない場面」や「自主事業が展開できないことにより運営面の収入にも影響し個人生活からも寄付や会費徴収どころではない」側面も見えたと述べた。また「委託事業については、契約の見直しなどが見られ、持続化給付金申請にあたっては地域によって『NPO は対象にならない』と明記され訴えたところ改善された事例」にも触れ「自粛と伝えながらも実施する責任所在を現場に丸投げされる実態」についても明らかにし「オンラインにもつながれない若者など本人の状況がつかめにくい」課題についても言及した。

次にこの調査結果を踏まえ、新型コロナウイルス感染拡大を受け、実践にどのような影響が生じこのなかで活動を展開し続けたか、3 名の団体から実践報告がなされた。

まず東京都品川区で居場所づくりに取り組む中塚史行氏（NPO 法人教育サポートセンターNIRE）からは、区の委託事業で取り組む子ども若者応援フリースペースの実態を紹介した。毎週月曜日から金曜日 10:00-19:00 までマンションの一室に設けられた居場所を開放。小学生から 40 代まで幅広く参加し年間 220 人ほどの登録者がいるが、3 月はとくに新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け一年間でもっとも利用する人が多い平均 30 人に及び、「子ども・若者は不安で誰かに話を聞いて欲しかったのではないか」と報告した。その後自粛活動のもと、オンラインでのアンケートの実施や、LINE のアカウントを取得し SNS や電話によるアウトリーチなどあらゆる手段を活用して把握できる子ども・若者と無理なく接点をもつ努力を重ね、現在は 13 名前後の参加者へと戻りつつあると述べた。

続く、倉光洋平氏（公益財団法人青少年健康センター）からは、20 代後半から 40 代にわたるひきこもり支援の現状について紹介した。新型コロナウイルス感染拡大により居場所運営の危機的状況が起こりどのように運営すればよいか苦戦するなかで、毎回 10 畳ほどの開催会場に 12 名の当事者と 6 名のスタッフがひしめく 3 密空間の場のもと「どう居場所を守りそこで働くスタッフへ配慮するか」向き合うことになった実践例を報告。人の話を聞く臨床心理士の立場から新型コロナウイルス感染拡大でひきこもり当事者の心の様子を①不安が緩和した人々、②不安が逆に増した人々、③表面的にはまったく変わらない人々に分類し説明。2 月 27 日以降全国一斉休校宣言によりイベント開催やスタッフの心理面にも影響を及ぼしたこと、そのなかでオンライン居場所の試み、参加できない人たちにはブログや動画で配信するなど工夫を凝らしたことを説明。また新しい人たちのアクセスが困難となり、とくに「不化化する当事者への積極的な関心を」向ける必要性を指摘した。

最後に、東京-岐阜-滋賀をまたぐ地方からのボトムアップ型の政策立案の回路構築活動が続ける佐藤真紀氏（OfficeJUN ストリートワーカー社会福祉士）からは、滋賀県米原市での学童保育実践に触れ、一斉休校により日中の子どもの居場所がなくなることへの危機を感じ取り支援員の予算措置を求める要望書を提出する動きや地方と大都市との意識のズレ、家庭に居場所のない人たちへの支援を求める請願活動などに触れ、想像以上に新型コロナウイルス感染拡大により破綻している現状について報告した。

全体共有の時間をもち、まとめとして、認定 NPO 法人文化学習協同ネットワークの佐藤洋作氏からは「命か経済かといった議論ではなくどちらにもリスクがあることを理解したうえで情報共有や科学的知見を国・行政は放棄してはならない」「居場所を継続するか若者にとってのサービスはそれに尽きる。社会から弾き飛ばされた若者たちをつなげていく支援が居場所である」。そして「移行期にあたる若者を権利として保障する発想が欠如しているところが見られる」と厳しく指摘。「オンラインとしてのツールは個々の開発からよいものを蓄積してさらによりよいものにしていく役割を JYC がもつことも新たな視点」と述べ、「若者が今の状況をどう受け止めそれを乗り越えていくための協同実践がさらに語られていかなければならない」と締めくくった。

（田中 敦）

シリーズ ひきこもりと老いを考える（第2回） アバランチさん～なるようになると思いながら生きる～

40～50代のひきこもり当事者と年齢の70～80代の親が同居し続ける「ひきこもり8050問題」は、ひきこもりの長期高年齢化の象徴的な課題となっています。本稿では6回連載のシリーズとして、8050問題の渦中にある当事者がもつ課題や親亡き後の生き方を考えていきます。第2回は当NPO主催の居場所「よりどころ」に参加したこともあるアバランチさん（59）にお話を伺いました。アバランチさんは中高生時代にはいじめられ、大学卒業後に就職したゼネコンでは思ったことを率直に言葉にすることが原因で上司と口論となり退職するなど生きにくさを経験。2011年にアスペルガー症候群と診断を受けるまでの数年間、社会的ひきこもりのような生活が続きしました。8050問題の渦中にある現在、どのようなことを考えているのか率直に答えてもらいました。

Q：現在の生活スタイルを教えてください

A：今の生活は、月～金の午前、B型事業所へ通って軽作業から得る工賃、障害年金の給付、生活保護費が収入で、民間の共同住宅で一人暮らしをしています。そして、発達障害、LGBTのカウンセリング、泌尿器科、耳鼻科と膠原病で通院、発達障害などの自助会や、趣味の会の集まりなどに参加しています。

Q：ご両親との関係はどのような状況ですか

A：5年前に、父の心疾患がもとで両親が老人ホームへ入居することとなったため、一人暮らしをするになりましたが、決して悪い関係ではなく、仏壇が両親の部屋にあるので、時間のある時、仏壇に手をあわせるため訪問しています。

Q：コロナウイルスによる自粛後の生活は？

A：自粛といっても、毎日事業所に行っていました。通所の時間は午前中だけとなり、感染や濃厚接触を避けるため、手洗いや消毒、テーブルと椅子の配置が変わりました。ただ毎日の食糧の買い物は、気をつけながらほぼ毎日、スーパーへ行っていました。

Q：アバランチさんはLGBT当事者でもあります。現在抱える悩みや今後の不安などは感じますか

A：私は、LGBT～性的マイノリティのT、トランスジェンダーといっても、性別に違和感を抱える性同一性障害ではないのです。たぶん、男女の心を半々持っているMtX（メール トゥ エックス）だと思います。しかし、普通の方のほとんどが、マスコミで露出しているトランスジェンダーの方が性別違和感を抱えて、医学的な治療を受けていると思われるとか、男性が恋愛対象とか偏った見方がトランスジェンダーだと思われることに困惑を覚えています。ト

ランスジェンダーなどには、いろいろあることと、XとかQとか、一言では説明が難しいことがあるのも知ってみたいです。

Q：8050問題についてどう思われますか

A：8050問題の渦中にある身として、両親や本人が情報を得られる手段が限られると、福祉の手がなかなか届きにくいということを感じています。

Q：ご両親、ご自身の老いについてどのような意識をもたれていますか

A：両親は今年の誕生日で、父が満90歳、母が満85歳を迎えますが、なるようになると考えているのではないかと思います。私自身も、これから老いていきますが、なるようになると思っています。ただ、60歳になる年に膠原病が発覚したのは想定外でした。

Q：今後の展望や社会に対する要望などご意見を聴かせてください

A：私は大学卒業後、社会でうまくいかない原因がわからず、2011年、51歳を迎える年に発達障害が判明して、それゆえということがわかり、つらかったけども事実を受け入れ、それなりのことをして乗り切ってきました。そして、人間の寿命の物理的な限界が120歳と聞いて、その年齢まで生きようと考えましたが、膠原病～全身強皮症という疾病が2020年1月に判明して、120歳まで生きるのはムリと考えました。たぶん、死ぬとき、コレステロールによる高血圧なのか？強皮症のコラーゲンによる高血圧なのか？それに付随する疾病で死ぬことも大いにありえると思います。それで、120歳から100歳に寿命を切り下げても生きようと考えました。そして今も独身ですが、良い交際相手と将来をともにできればと考えています。

「いまこそ語ろう、それぞれのひきこもり」を読んで

日本評論社から発行された「いまこそ語ろう、それぞれのひきこもり」は総勢16名のひきこもり経験者が語る当事者手記だ。当事者手記という種類の文章はこれまでも読み、当事者自らが登壇した講演会で話を聴く機会もあった。この十数年で新たな発見があったとすれば自ら支援側の立場になった当事者が増えたことが挙げられる。同書にもその立場で活動する林恭子氏を筆頭に、宮武将大氏、丸山康彦氏などひきこもり界では知名度が高い面々が登場する。彼ら彼女らの語り口は明瞭で随分しっかりした考えを持たれている人が多い。またそういう語れるものを持っているからこそ文章化できるのだ。

この界限ではこういったひきこもり経験者をキラキラ系当事者と呼ぶそうだが、インターネットの購読者レビューにはそのようなハイレベルの経験者だけが発言しているのではないかという指摘もみられ、必ずしも高い評価を得ているとはいえない。執筆者の一人泉翔氏は「そもそも何故同書に自分が執筆者として選ばれたのか」という疑問を編集者側に向けて問いかけているのだからそういった評価がでるのも仕方がないだろう。

しかし泉氏の主張は平板な自分史を語る当事者発言ではない切り込みがあり、根拠に基づいた冷静な文章の中にキラキラ系とは異なる強い意志を感じる。実は本書の読みどころは泉氏を含む3人が執筆した最後の章にあ

る。心地よく読み進めてきた読者は最後の章で意外な結末に出会うわけだが、それが編集者の狙いでもあったのだろう。

ぼそっと池井多氏の文章は度が過ぎるようにも感じるが、医療現場で繰り広げられている可視化されにくいハラスメントを追及する態度には感服する。また勝山実氏が言うところの「就労支援から脱落したものは自分の無能を思い知れ」という辛辣な発言の裏側にある真実を見抜く眼力が読者には求められ困惑するかもしれないが、そこはひきこもり名人特有の表現を楽しんでどうか。杉本賢治氏のコロナ禍における認知症の母親との暮らしを綴った文章は、生か死かの二者択一を迫られたリアルな悩みが浮き彫りにされ、今の状況だからこそ読むに値する。

6月13日には執筆者と精神科医で本書の監修者でもある斎藤環氏を交えたZOOMによるオンライン・トーク・イベントを開催。

「陰から陽へ」ひきこもり界もイメージが進化していると痛感するが、キラキラ光らなくても陰のまま閉じこもることも価値はあると思うのだが。欲を言えば一歩前を進むひきこもりの経験者たちが牽引役となり、8050時代をどう乗り越えるか、未来へ向けた話を聞いてみたい。またコロナ禍で平然と読める薄ぼんやりとした平和のありがたさを感じたことも記しておきたい。

(吉川 修司)



ご寄付ありがとうございます

山田 一範 様 50,000 円

小松 英行 様 10,000 円

また絵葉書によるピア・アウトリーチ支援
8050 問題賛同寄付金に対して 20 名を超
す多数の方からご寄付いただきました。

当事者団体活動を円滑にすすめていくために活用していきます。



Photo by Kaise

皆様からの投稿をお待ちしています

〒064-0824 札幌市中央区北4条西26丁目3-2

「NPO 法人 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク」事務局 通信編集部 宛

e-mail ; info@letter-post.com

刊行物の紹介



現在は札幌市の「よりどころ」でピアノ・サポーターを務める。

ただ、生き延びてほしい
「声をあげて、学び続けて」
口をつぐむ親たちへの提言

ルポ「ひきこもり」58——小樽の家族会元世話人が語る「私の体験」(6)

『北方ジャーナル 小樽の家族会元世話人語る 私の体験』

月刊情報誌「北方ジャーナル」では、小樽市で「小樽不登校・ひきこもり家族交流会」を主宰していた元世話人で当NPO 監事を務める鈴木祐子さんが1996年から始まった我が子の不登校・ひきこもりの体験について語った内容を6回に渡り連載した。

2020年7月号では、1997年から20年以上続けてきた家族交流会を辞めた背景や、現在札幌市の公設民営の居場所「よりどころ」親の会のピアサポーターで活躍する姿、これまで出会ってきた人との出会いについて語られた。

保守的な地域に生き活動を続ける苦勞と困難は言葉に尽くせない困難の連続だったが、鈴木さんは「これも人生」とささりと言ったのける。人の心無い言動に傷つけられ落ち込んだりしても、それを癒し立ち直る勇気を与えるのはやはり人なのだろう。（中略）「なぜ自分の子どもが不登校やひきこもりになったのか親子関係を紐解いてほしい。そのためには、声をあげて学び続けていくことが必要です」（本文から抜粋）。精力的にひきこもりを追い続けるフリージャーナリストの武智敦子氏が取材執筆する。

(有) Re Studio 発行 A4 版 定価 880 円 (税別)

『ひきこもり・生きづらさについての実態調査 2019 報告書』

ひきこもりＵＸ会議（林恭子代表）が昨年度実施した千人以上の当事者が回答した「ひきこもり・生きづらさについての実態調査」の報告書が発行された。これほど多くの当事者・経験者等から直接回答が寄せられた調査は前例がなく、今後の社会のインクルーシブデザインや、生きづらさを抱える方たちの人生（再）設計に活かすための貴重な報告書に仕上がっている。報告書は冊子版とPDF版があり、ひきこもりＵＸ会議のホームページから閲覧（冊子版購入）ができる。<https://uxkaigi.base.shop/>
一般社団法人ひきこもりＵＸ会議・編／A4版3冊セット 定価 2,000円（オンラインショップのみで販売）



『KHJ ジャーナル たびだち第 94 号（夏号）』に「よりどころ」オンライン自助会について掲載



本誌 26～28 ページに「単純に中止ではなく～緊急事態宣言から 1 週間でオンライン居場所スタート 札幌市コロナ禍でオンラインをいち早く導入、公設民営の居場所『よりどころ』（札幌市委託事業）」として当 NPO の取り組みが掲載されました。

そのほか、オーソリティーたちの生き方「ひきこもることの価値の転換が起こるアフターコロナ」と題して池田佳世×伊藤正俊×中垣内正和×池上正樹らによる座談会や、本人家族の生の声「コロナと孤独」「先の見えない不安も良い対話の機会の到来と捉えたい」「当事者の気分を自分事と思わせるコロナ」「皆で苦しんでいる人に寄り添える弱者にやさしい社会へ」、家族会リモート座談会「困った人がテレワークに出会える仕組みをつくりたい」、「知っておきたいひきこもりの障害年金受給事例」「暴力的支援ビジネスの最近の情勢」などの情報が掲載。

NPO 法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会（発行）定価 500 円
「たびだち」は当NPOでも定価で頒布しています。



こちら事務局！

今後の動き(2020年7月～)

◆居場所「よりどころ」自助会「SANGOの会」再開に伴う留意事項について

札幌市は北海道の緊急事態宣言の解除に伴い2月末から開催を中止していました、居場所「よりどころ」当事者会・親の会を6月1日(月)から再開する決定をいたしました。また当NPO主催の自助会SANGOの会も8月5日(水)から再開します。しかしながら情勢は混沌し不安定であることから、安全に参加していただくために例会出席にあたってはマスクを着用のうえ、咳エチケットの徹底、手洗い又は消毒を行うなどの留意事項を遵守していただくことをお願いする次第です。たいへん厳しい状況のなかでの再開ですが、よろしくお願いします。留意事項については団体ホームページをご覧ください。<http://letter-post.com/>

◆「SANGOの会」例会のご案内

2020年7月、8月は下記日程にて行います。新型コロナウイルス感染拡大による体調不安者に考慮してオンライン例会も併行して実施します。概ね35歳を基点にしていますが年齢に関係なく、ひきこもり当事者や経験者で、同様な仲間と話をしてみたい聞いてみたいと思っている方、またいろいろな情報を得たいと考えている方は、いらしてください。オンライン例会に参加ご希望の方は当NPOホームページから事前申し込みが必要です。詳細は事務局までお問い合わせください。

《通常例会》※ 感染防止の観点から当面夜間開催は自粛します

とき：8月5日(水) 午後2時00分から4時00分まで

会場：札幌市社会福祉総合センター4階 札幌市ボランティア活動センター 研修室B

(札幌市中央区大通西19丁目1-1 地下鉄東西線西18丁目駅下車徒歩3分)

《オンライン初心者(たとえば体調不安がある人、初参加の人)例会》

とき：7月29日(水) 8月26日(水)

開催時間：いずれも午後5時30分から7時30分まで

開催のご案内は随時、当NPOのホームページで公開していきますのでご確認ください。

◆居場所「よりどころ」開催のご案内(7月～8月)

(当事者会) 7月20日(月)※ 9階920会議室 8月3日(月)※ 5階510会議室

8月17日(月)※ 10階1010会議室(感染防止の観点から当初の貸室を変更)

(親の会) 7月27日(月)※ 8月10日(月/祝) 8月24日(月)※

10階1010会議室

開催会場：北海道立道民活動センター「かでる2.7」

(札幌市中央区北2条西7丁目 道民活動センタービル) JR札幌駅南口から徒歩13分

開催時間：いずれも午後1時30分から午後3時00分まで(短縮開催)

利用対象：ひきこもり当事者及びその家族

参加費：無料 事前申込不要 直接会場にいらしてください。

※印の日は、ひきこもり地域支援センター相談員の参加予定日です。

☆刊行物のご紹介

札幌圏ひきこもり地域拠点型居場所移行支援開発研究事業報告書～

地域を切り拓くひきこもりサテライト・カフェ事業の展開

地元を離れ他地域の居場所にアクセス(移行)する困難を有する北海道の広域性や交通費の課題。

居場所づくりが活発化するなかで、真正面からこの課題について実践研究し考察を加えました。

A4判平綴じ印刷製本モノクロ全41頁 郵送料込1冊500円

刊行物については事務局までお問い合わせください

☆編集後記☆

当事者も様々な体験を蓄積するなかで変化していく存在。ある意味当事者を呼称し続けることは困難で活動家であったり評論家であったりする。当事者の経験と専門職の経験の融合を活かしていきたい。

(発行責任者 理事長 田中 敦)

無断複製はおやめください